JAPAN MUSIC TRADES, monthly music products trade magazine
Japan Music Trade Co., Ltd., 2-18-21, Soto-kanda, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0021, Japan.
平成27年1月1日発行（毎月1日発行）昭和38年2月5日第三種郵便物認可　ミュージックトレード 第53巻 第1号

# ミュージックトレード®

THE MUSIC TRADESとの編集提携による本格的音楽業界専門誌

2015/1

株式会社ミュージックトレード社
〒101-0021東京都千代田区外神田2-18-21楽器会館4F
☎03-3251-7491　http://www.musictrades.co.jp/

# 来るか!? 電子オルガンルネッサンス

## 中国に見る新しい電子オルガン音楽の台頭

阿方 俊／昭和音楽大学電子オルガンアドバイザー

中国では今、かつて日本の高度経済成長期に、エレクトーンなど電子オルガンが、一大発展した時期に匹敵する力強いうねりが見られる。この動きは日本の場合と発展の方向性において、いささか異なる面を持ち、今後ますます進むであろうハイテク時代にマッチした電子オルガン音楽の、ルネッサンスにつながり得る可能性を見ることができる。

その一例として、昨年11月、広州の星海音楽学院で9日間にわたって華々しく開催され、大成功を収めた「ヤマハ杯エレクトーンコンクール」および「電子キーボード音楽アーツフェスティバル」をレポートしたい。

### 産学協同で成功を導く！ヤマハ杯エレクトーンコンクール

通常、エレクトーンをはじめとする電子オルガンコンクールと言えば、特別なものを除いて企業主催によるものである。しかし11月14日から17日、星海音楽学院（中国名＝シンハイ。華南地方を代表する国立の音楽教育機関。中国の音楽学院は修士号を授与できる日本の音楽大学に相当）で開催されたものは一味違ったものであった。

①主催＝星海音楽学院および中国ヤマハ

②後援＝天津音楽学院、瀋陽音楽学院、四川音楽学院ほか6音楽学院

③実行委員会＝唐永葆（星海音楽学院院長）ほか後援音楽学院の副院長

④規模＝地区予選（後援の音楽学院を中心に行われた）参加者1、350名、当日予選参加者405名、審査員

校内のいたる所にコンクールとフェスティバルの横断幕

星海音楽学院シンフォニーホール入り口に設置された「2014中国ヤマハ杯電子オルガンコンクール」と後援した「音楽学院名」を記した看板

受賞者の記念撮影に湧くステージ

重奏の部で演奏中のエレクトーンと中国琴

団40名

⑤部門＝年齢別に児童組、少年組、青年組、成人組の4組に分かれ、各々ソロ部門と重奏部門（エレクトーンまたは伝統楽器との重奏）

⑥日程＝14日（出場順番抽選）、15日、16日（予選）、17日（本選、授賞式）

質的量的に成功裡に終わったことに対して、ヤマハ中国の鶴見照彦社長は、「全国レベルでのこのような素晴らしい大会に協力でき、心から嬉しく思う」と感想を述べ、電子オルガン鍵盤楽器営業部の藤田隆部長は「想像をはるかに超えたすばらしいものであった。これは星海音楽学院ほか関係者の熱意と努力によるもの」、またかつて早稲田大学のエレクトーンクラブに在籍していたヤマハ中国華南事務所の丸山涼路所長は「産学協同を念頭に、この楽器の中国から世界への普及活動にまい進したい」と語っている。

この中で共通していることは、学主導のもとで産学協同をクールに行った結果に対する評価ではなかろうか。

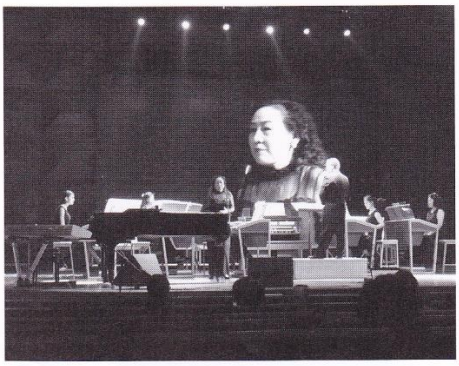
広州電子キーボードアーツフェスティバル開会式後の記念撮影
（星海音楽学院シンフォニーホールロビー入口前にて）

## 他楽器との共演による新しい方向

# 電子キーボード音楽アーツフェスティバル

コンクールに引き続き11月18日から21日の4日間、電子キーボード音楽アーツフェスティバルが開かれた。

内容は以下のように多岐に渡るもの。



司馬麗子（ソプラノ。紹興大学客員教授）によるアリア、ヴェルディ「運命の力」から“神よ、平和を与えたまえ”、伴奏：吉林芸術学院電子管弦楽団、指揮：郭宗愷（台湾・東海大学教授）

・学術講座（阿方俊、郭宗愷、鮑元愷、李未明、M・マンノ）

・研究討論会（日中電子オルガン交流30年史、電子オルガン科の今後）

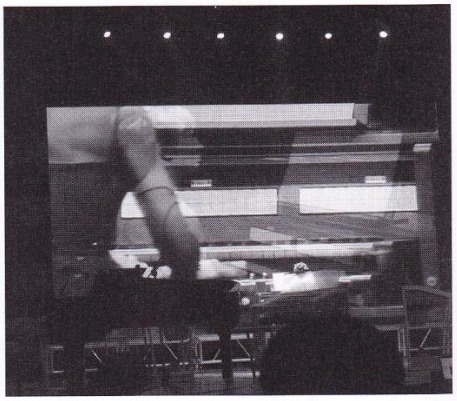
・学術報告（音楽学院電子オルガン講師代表による）

・演奏講座（内海源太）

・コンサート（窪田宏、内海源太&楠田しおり、電子オルガン専攻生選抜、電子オルガン講師代表）

電子オルガンはソロ楽器として演奏されることが多いが、同時に大切な分野としてアンサンブルや伴奏がある。

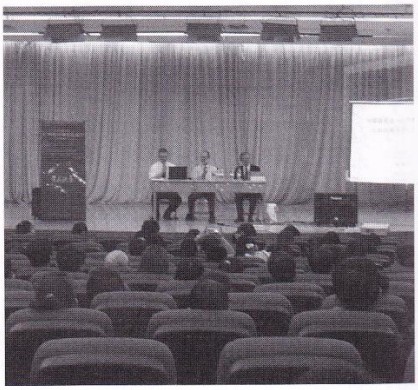
このコンクールではソロ部門に加えて重奏部門が設けられ、また閉会式の後に開かれた電子オルガン講師によるコンサートでは、吉林芸術学院電子管弦楽団（エレクトーン5台によるアンサンブル）との共演によるオペラ・アリアや、ピアノコンチェルトが披露され、これらの分野の将来的可能性を示した。



21日の講師コンサートではエレクトーンの他にローランドのオルガンや中国製の電子オルガンRingwayの演奏も披露された

ここでプーランク「2台のピアノのためのコンチェルト」を演奏したヤマハアーティストで星海音楽学院付属高校ピアノ科の孫鵬傑主任は、「私はピアノコンチェルトを演奏する機会が比較的多くあるが、一流のオーケストラは別として、楽器群のバランスや音程が定まらない場合がよくあり、それらに気を取られてピアノに集中できないことがある。その点、今回はモニタースピーカーからバランスの取れた音を聞くことができ音楽的満足感があり、この演奏形態の将来的可能性を感じることができた」と共演の印象を語った。

コンクールとフェスティバルを通して、今、中国の電子オルガン界全体が電子オルガン音楽ルネッサンスに向かって、大きく羽ばたく勢いを肌で感じ得た充実した9日間であった。



学術発表中の筆者（右端）